

オオシラビソの枯損に係る検討会が開催されました

令和4年12月2日(金)、宮城県仙台市のTKPガーデンシティ仙台で「令和4年度蔵王地域におけるオオシラビソの枯損に係る検討会」が開催されました。

この検討会は、蔵王地域のオオシラビソ(別名アオモリドマツ)林の枯損状況を把握・分析し、今後の対応等を検討するため、平成26年度以降、東北森林管理局が、森林総合研究所、山形森林管理署、山形大学、山形県森林研究研修センター等山形県関係機関、山形市等自治体、蔵王ロープウェイ(株)等を構成員・オブザーバーとして設置しているもので、山塊を同じくしオオシラビソの立ち枯れが確認される宮城県側の関係者も参画しています。

これまでは「アオモリドマツの枯損に係る検討会」と称していましたが、今年から山形県側では「オオシラビソ」を用いていることから、本検討会も今回から改題して開催されました。

当日は、森林総合研究所東北支所の山中高史支所長を座長に、森林管理局、山形・仙台両森林管理署等から、蔵王地域におけるアオモリドマツの枯損実態や再生に向けた取組について報告しました。

山形署からは、モニタリングを通じて収集した写真や調査結果を提示しつつ、枯損の経緯と現在までの対応、昆虫による食害、樹氷形成の動向、低標高地に自生する苗の高標高地への移植試験や種子採取の状況等を報告しました。また、山形県環境エネルギー一部みどり自然課から、「樹氷復活県民会議」の設立に向けた準備状況のご紹介がありました。

議事の中では、森林総合研究所から、オオシラビソの枯損の一因となったガの一種であるトウヒツヅリヒメハマキの発生状況とともに、トウヒツヅリヒメハマキを捕食して天敵の役割を果たすハチの生育密度が比較的低位にあることが報告され、引き続き、モニタリングをしっかりと行って今後の動向を注視していくことが必要との報告がありました。

山形署では、今後も、特に昆虫の動向に注意して観察を続けていくなど有識者のアドバイスを活かして各種モニタリング調査を継続しつつ、関係機関のご協力をいただきながら、本格的な被害地の復旧に向けて必要な知見を蓄積してまいります。

